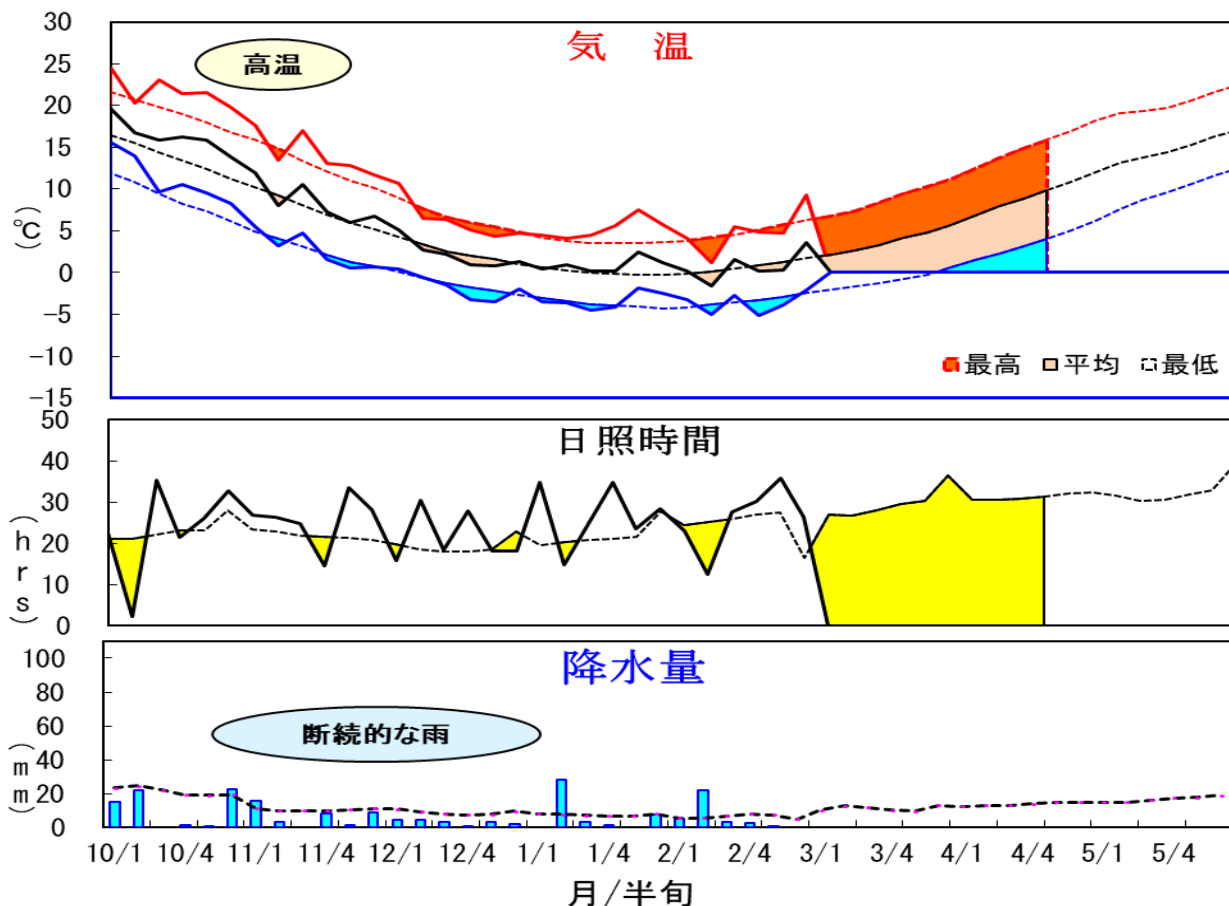


麦 作 情 報 第 2 号

令和7年 3月 4日：JA全農みやぎ

～適期に播種されたほ場では 越冬前生育量を概ね確保！～

1 これまでの気象経過（古川アメダス）



2 東北地方の1カ月予報【3月1日～3月28日までの天候見通し 気象庁 HP より】

- ・東北太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多い。
- ・気温は、高い確率 50%，平年並みの確率 30%，低い確率 20%。
- ・降水量は、東北太平洋側では多い確率 40%，平年並若しくは少ない確率 30%。
- ・日照時間は、東北太平洋側では多い若しくは平年並の確率 30%，少ない確率 40%。

気温、降水量、日照時間、降雪量の各階級の確率（％）			
気温	東北地方	向こう1か月 03/01～03/28	20 30 50
		1週目 03/01～03/07	20 50 30
		2週目 03/08～03/14	30 50 20
		3～4週目 03/15～03/28	20 30 50
降水量	東北日本海側	向こう1か月 03/01～03/28	30 40 30
	東北太平洋側	向こう1か月 03/01～03/28	30 30 40
日照時間	東北日本海側	向こう1か月 03/01～03/28	20 40 40
	東北太平洋側	向こう1か月 03/01～03/28	40 30 30
降雪量	東北日本海側	向こう1か月 03/01～03/28	50 30 20

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

3 令和6年産麦類の作柄・品質及び検査結果

(1) 作柄・品質【令和6年産 麦類生育調査ほ成績検討会資料より抜粋】

- ・大麦では、幼穂形成始期は平年より19～23日早く、減数分裂期は9～11日早く、出穂期は10～12日早く、開花期は10～14日早かった。成熟期は平年より7～10日早かった。
- ・小麦では、幼穂形成始期は平年より13～15日早く、減数分裂期は6～9日早く、出穂期は9～10日早く、開花期は9～11日早かった。成熟期は平年より9～11日早かった。

作況試験ほ 生育ステージ

	品種	区分	播種期 (月日)	幼穂形成始期		減数分裂期		出穂期		開花期		成熟期	
				本年 (月日)	平年差 (日)	本年 (月日)	平年差 (日)	本年 (月日)	平年差 (日)	本年 (月日)	平年差 (日)	本年 (月日)	平年差 (日)
大麦	シュンライ	中旬播種	10/19	1/5	-23	4/4	-11	4/15	-10	4/22	-10	5/30	-7
		下旬播種	10/31	2/12	-19	4/8	-10	4/19	-10	4/25	-12	5/31	-9
	ミノリムギ	中旬播種	10/19	1/16	-23	4/10	-9	4/19	-10	4/25	-10	5/31	-9
		下旬播種	10/31	2/13	-19	4/12	-9	4/21	-12	4/26	-14	6/1	-10
小麦	シラネコムギ	中旬播種	10/19	2/23	-15	4/18	-8	4/26	-9	5/5	-9	6/12	-10
		下旬播種	10/31	3/6	-13	4/21	-6	4/28	-9	5/6	-11	6/16	-9
	夏黄金	中旬播種	10/19	2/24	-14	4/17	-9	4/26	-10	5/5	-9	6/12	-11
		下旬播種	10/31	3/5	-15	4/20	-7	4/28	-9	5/6	-10	6/14	-11

注1) 中旬播種区の平年値は、過去7か年中の最高値と最低値を除いた5か年分の平均値
 2) 下旬播種区はH29から調査開始のため、平年値は過去5か年分の平均値

- ・稈長は平年より短く、穂長は大麦では平年より長かったが、小麦では平年より短かった。
- ・ m^2 穂数は平年より少なく、 m^2 整粒数も少なかった。千粒重は大麦では平年を下回ったが、小麦では平年を上回った。
- ・子実重は、大麦、小麦ともに平年を下回った。

作況試験ほ 成熟期調査・収量調査

	品種	区分	稈長(cm)		穂長(cm)		m^2 穂数(本)		m^2 整粒数(百粒/ m^2)		千粒重(g)		子実重(kg/a)	
			本年	平年比 (%)	本年	平年比 (%)	本年	平年比 (%)	本年	平年比 (%)	本年	平年比 (%)	本年	平年比 (%)
大麦	シュンライ	中旬播種	70.2	85	3.9	118	381	78	113.1	71	32.7	88	37.0	63
		下旬播種	70.2	86	3.9	116	480	98	138.3	95	34.2	88	47.3	84
	ミノリムギ	中旬播種	86.4	88	3.8	99	465	86	149.5	82	31.1	93	46.5	74
		下旬播種	98.8	103	4.2	104	577	109	188.3	107	31.6	89	59.5	97
小麦	シラネコムギ	中旬播種	74.3	90	7.0	97	414	85	119.8	75	43.4	108	52.0	79
		下旬播種	70.9	88	6.7	90	467	80	93.9	55	45.6	115	42.8	64
	夏黄金	中旬播種	70.9	91	7.7	96	465	76	73.4	45	41.4	108	30.4	47
		下旬播種	70.6	93	7.4	91	535	90	80.7	47	41.4	114	33.4	90

注1) 中旬播種区の平年値は、過去7か年中の最高値と最低値を除いた5か年分の平均値
 2) 下旬播種区はH29から調査開始のため、平年値は過去5か年分の平均値
 3) 整粒数、千粒重、子実重は、2.0mmの篩目による

- ・大麦の外観品質は平年並み～優れ、ミノリムギの硝子率は平年より高かったが、許容値の50%以下であった。空洞麦は平年より少なかった。

作況試験ほ 大麦品質調査

品種	区分	外観品質			硝子率(%)			空洞麦率(%)		
		本年	前年	平年	本年	前年	平年	本年	前年	平年
シュンライ	中旬播種	4.0	4.0	4.2	30.3	43.1	27.9	0.0	10.2	1.5
	下旬播種	3.0	3.0	4.4	43.4	47.5	34.0	0.0	8.2	3.3
ミノリムギ	中旬播種	3.7	4.0	4.1	48.4	37.1	31.6	0.7	6.0	1.7
	下旬播種	4.0	3.0	4.6	35.3	43.1	26.4	0.4	2.7	2.9

注1) 中旬播種区の平年値は、過去7か年中の最高値と最低値を除いた5か年分の平均値
 2) 下旬播種区はH29から調査開始のため、平年値は過去5か年分の平均値
 3) 外観品質: 1: 上の上, 2: 上の下, 3: 中の上, 4: 中の中, 5: 中の下, 6: 下
 4) 硝子率: 切断した断面を観察し、硝子状部分70%以上を硝子質粒、30%以下を粉状質粒、中間を中間質粒とし、次の計算式により求めた。(硝子率粒×1+中間質粒×0.5)/調査粒数×100
 5) 空洞麦: 粒の中心部を横に切断し、肉眼により空洞が確認できた粒数の割合。

- ・小麦の外観品質は平年より優れ、粗タンパク質含有率は平年より高かった。

作況試験ほ 小麦品質調査

品種	区分	外観品質			粗タンパク質含有率 (%)		
		本年	前年	平年	本年	前年	平年
シラネコムギ	中旬播種	2.7	2.0	3.9	13.3	11.6	11.4
	下旬播種	3.0	3.0	4.1	12.0	12.3	11.4
夏黄金	中旬播種	4.0	2.0	4.1	12.9	12.7	12.8
	下旬播種	4.0	3.0	4.4	12.8	11.7	12.1

注1) 中旬播種区の平年値は、過去7か年中の最高値と最低値を除いた5か年分の平均値

2) 下旬播種区はH29から調査開始のため、平年値は過去5か年分の平均値

3) 外観品質: 1: 上の上, 2: 上の下, 3: 中の上, 4: 中の中, 5: 中の下, 6: 下

4) 粗タンパク質含有率: 近赤外線測定器(FOSS社製 Infratec NOVA)

子実水分13.5%換算値

(2) 検査結果等【農林水産省 HP よりデータ引用】

- ・検査等級比率は、令和元年から5年までの平均値と比較すると、小麦では「シラネコムギ」及び「夏黄金」では1等比率が高いが、「あおばの恋」及び「銀河のちから」は2等比率が高い。大麦では、全品種で2等比率が高い(下表)。
- ・6年産は、小麦は「銀河のちから」以外の品種は1等比率が高く、令和元年以降で最も品質が高かった。
- ・大麦は、小麦とは逆に品質が悪く、令和元年以降で最も1等比率が低かった。落等の格付け理由は「形質」が最も多く、細麦や未熟粒があり充実不足と判断された。

【小麦】

品種名	年産	検査数量 (t)	等級数量 (t)			等級比率 (%)		
			1等	2等	規格外	1等	2等	規格外
あおばの恋	R 6年産	318	216	96	7	67.8	30.1	2.1
	R 5年産	279	135	116	28	48.4	41.6	10.0
	R1-R5平均	389	126	213	51	37.9	50.5	11.6
銀河のちから	R 6年産	72	-	66	6	-	91.7	8.3
	R 5年産	97	-	90	7	-	92.8	7.2
	R1-R5平均	57	43	44	6	20.6	77.3	6.2
シラネコムギ	R 6年産	1,772	1,403	258	111	79.2	14.6	6.3
	R 5年産	2,155	975	882	297	45.3	40.9	13.8
	R1-R5平均	2,194	1,352	520	322	62.0	23.6	14.5
夏黄金	R 6年産	2,906	2,416	326	165	83.1	11.2	5.7
	R 5年産	2,356	1,265	763	329	53.7	32.4	13.9
	R1-R5平均	1,737	1,135	352	250	67.2	18.3	14.6

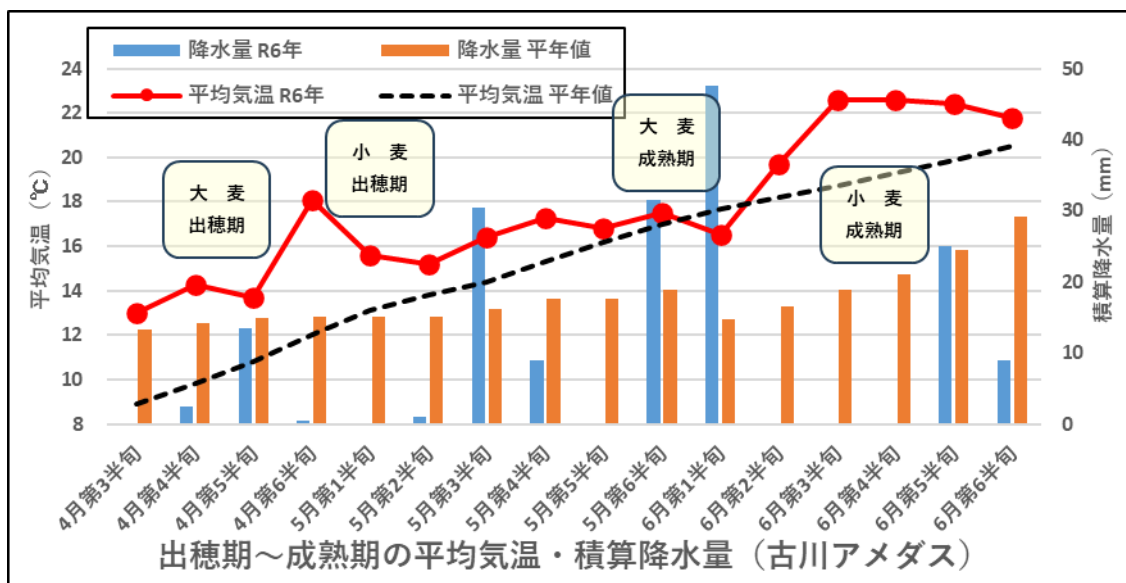
注) R 6年産の検査結果は、令和6年10月31日現在のものである。

【大麦】

品種名	年産	検査数量 (t)	等級数量 (t)			等級比率 (%)		
			1等	2等	規格外	1等	2等	規格外
シュンライ	R 6年産	1,493	61	890	542	4.1	59.6	36.3
	R 5年産	1,695	143	1,180	371	8.5	69.6	21.9
	R1-R5平均	1,745	142	1,280	323	7.9	73.7	18.5
ホワイトファイバー	R 6年産	2,575	17	1,946	611	0.7	75.6	23.7
	R 5年産	2,549	53	1,711	785	2.1	67.1	30.8
	R1-R5平均	1,653	166	1,125	363	13.7	65.9	20.4
ミノリムギ	R 6年産	874	4	426	444	0.5	48.7	50.8
	R 5年産	1,017	8	665	344	0.8	65.4	33.9
	R1-R5平均	943	84	603	257	8.6	64.4	27.0

注) R 6年産の検査結果は、令和6年10月31日現在のものである。

(3) 作柄解析



生育調査ほ 生育ステージ

区分	品種名	地域	播種期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)
大麦	シュンライ	大河原	11/16	4/24	5/30
		仙台	10/5	4/16	5/26
		桃生	10/2	4/15	5/28
	ミノリムギ	桃生	10/14	4/25	6/5
	ホワイトファイバー	大河原	11/11	4/25	5/30
小麦	あおばの恋	豊里	11/2	4/29	6/18
	シラネコムギ	古川	10/20	4/29	6/14
		鹿島台	10/26	4/29	6/14
		桃生	10/25	5/1	6/18
	夏黄金	美里	10/23	4/28	6/14

- ・大麦・小麦ともに、冬季期間の高温で生育が旺盛となり、肥料の消費や麦の消耗によって穂数の減少や整粒歩合が低下したためと考えられる（古川農業試験場作況試験ほデータ解析より）。
- ・令和6年産は、2月以降の高温によって出穂期が平年より10日程度早まり、大麦では4月15～21日頃、小麦では4月28日～5月1日頃に出穂期を迎えた。
- ・大麦の出穂後も高温が続き、さらに登熟前期の降水量が少なかったため、養分の転流が抑えられたことと、成熟期頃の降雨によって刈り取りが遅れ品質が低下したものと推測される。
- ・一方、小麦は出穂後の降雨によって養分の転流が進んだこと、成熟期頃に降雨が無く収穫が順調に行われたために高い品質が得られたと推測される。

4 令和7年産麦類の生育状況

(1) 古川農業試験場 作況試験（2月17日調査、画像は2月26日現在）

- ・中旬（10/18）播種区は、草丈・茎数は概ね平年並み～やや上回っており、**適期に播種されたほ場では、越冬前の目標生育量は概ね確保されている。**
- ・大麦の幼穂長は0.8～2.4mmで、早生品種のシュンライは概ね幼穂形成始期に達したと思われる。
- ・小麦の幼穂長は概ね平年並みで、幼穂形成始期にはまだ達していない。

	品種・区分	草丈			茎数			幼穂長(mm)			幼穂形成始期		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年	前年	平年	本年 (月/日)	前年 (月/日)	平年 (月/日)
大麦	シュンライ 中旬	12.9	113	114	979	114	105	2.4	2.8	1.7	1/6	1/5	1/24
	同 下旬	7.6	92	101	565	71	90	1.0	1.1	0.8	2/19	2/12	3/3
	ミノリムギ中旬	14.1	108	118	993	104	98	1.7	2.3	1.5	1/20	1/16	2/5
	同 下旬	9.1	103	113	866	98	134	0.8	1.0	0.7	-	2/13	3/4
小麦	シラネコムギ中旬	14.7	107	121	1005	103	101	0.5	0.5	0.4	-	2/23	3/4
	同 下旬	10.2	100	102	555	55	85	0.2	0.4	0.2	-	3/6	3/19
	夏黄金 中旬	11.5	106	112	981	105	110	0.5	0.4	0.4	-	2/24	3/6
	同 下旬	8.7	107	103	541	79	119	0.2	0.3	0.2	-	3/5	3/20

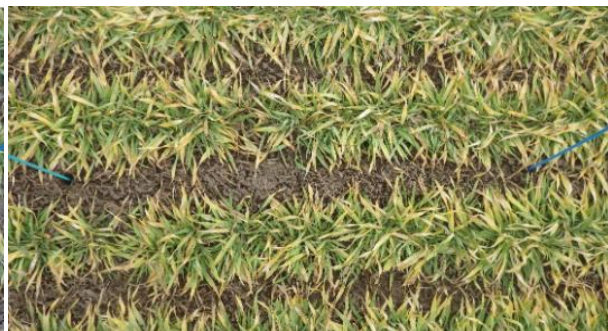
注1) 中旬は10月18日, 下旬は10月31日に播種。

注2) 積雪により未調査の年があったため, 平年値は調査を実施した過去5か年分の平均値とした。

注3) 幼穂形成始期: 幼穂長が1mmに達した日。



【作況 シュンライ 10月18日播種】



【作況 ミノリムギ 10月18日播種】



【作況 シラネコムギ 10月18日播種】



【作況 夏黄金 10月18日播種】

- ・ 下旬 (10/31) 播種区は, 草丈は概ね平年並みだが, 茎数は平年を下回っている区もあり, 生育量にややムラが見られる。
- ・ 幼穂長は, 概ね平年並である。



【作況 シュンライ 10月31日播種】



【作況 ミノリムギ 10月31日播種】



【作況 シラネコムギ 10月31日播種】



【作況 夏黄金 10月31日播種】

(2) 麦類生育調査ほ (2月10日調査)

- ・10月中に播種されたほ場では、草丈・茎数とも概ね平年並みの生育量となっており、適期に播種された大麦は、概ね幼穂形成始期に達したと推測される。小麦は、まだ幼穂形成始期に達していない。
- ・大豆の後作やほ場の準備の遅れ、降雨の影響で播種が遅れたほ場では、草丈も短く、茎数不足のほ場も見られる。

	品種・区分	地域	播種期 (月日)	草丈			茎数			幼穂長			葉色 本年 (GM値)
				本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (mm)	前年差	平年差	
大麦	シュンライ	角田	12/8	3.3	-	-	100	-	-	0.0	-	-	欠測
		仙台	10/14	13.4	114	-	542	65	-	1.0	-0.8	-	32.9
		桃生	10/24	11.4	59	92	666	84	94	0.9	-2.4	-0.6	37.8
	ミノリムギ	桃生	10/20	12.6	103	116	1,003	117	145	1.4	0.1	0.5	41.1
	ホワイトファイバー	大河原	11/20	4.7	54	-	515	144	-	0.0	-0.2	-	欠測
小麦	あおばの恋	豊里	10/28	9.2	89	102	438	96	196	0.0	-0.4	-0.2	42.6
	シラネコムギ	古川	10/19	10.2	70	99	1,395	91	264	0.5	0.1	0.3	45.0
		鹿島台	11/30	5.4	37	56	330	33	56	0.0	-0.2	0.0	欠測
		桃生	11/1	13.9	154	-	624	66	-	0.2	-0.6	-	34.3
	夏黄金	涌谷	11/5	9.1	82	-	469	74	-	0.1	0.1	-	40.1

注1) 平年値は、過去7か年中の値から、最高値と最低値を除いた5か年分の平均値で、平年比(差)は平年値との比較。

注2) 角田「シュンライ」は、令和6年度播種から調査地変更のため、前年値(比・差)及び平年値(比・差)はない。

注3) 大河原「ホワイトファイバー」は、令和元年度播種から調査のため、平年値(比・差)はない。

注4) 仙台「シュンライ」は、令和4年度播種から調査のため、平年値(比・差)はない。

注5) 涌谷「夏黄金」は、令和元年度播種から調査地変更のため、平年値(比・差)はない。

注6) 桃生「シラネコムギ」は、令和5年度播種から調査地変更のため、平年値(比・差)はない。

注7) 「欠測」は未調査であることを示す。

注8) 幼穂長において、観察の結果、幼穂が確認できなかった場合は0.0と示す。

注9) 葉色は令和6年度播種分から測定を開始したため、前年値・平年値はない。

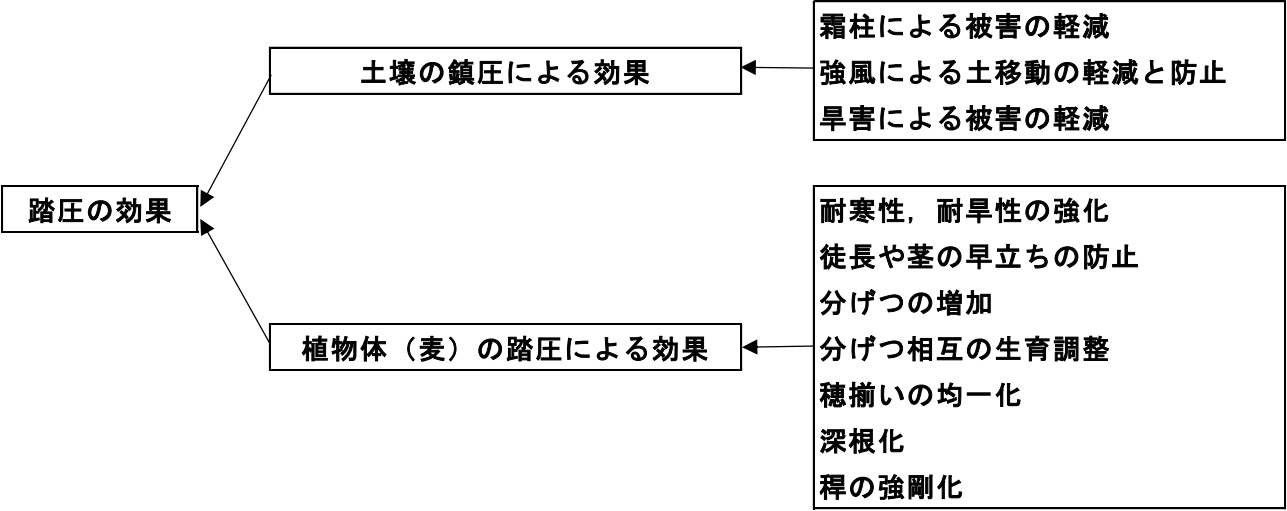
5 越冬後の技術対策

(1) 排水対策

- ◆これから幼穂形成始期に入り、節間伸長が始まる時期は、湿害の影響を受けやすい時期である。
- ・ほ場が排水不良になり土壌中の酸素が不足すると、根腐れや組織の壊死が生じ、根部の伸長が停止して養分吸収が妨げられる。
- ・明渠の設置は5 m間隔で、深さは20～30cmが望ましい。
- ・播種の遅れや、鳥害の被害を受けて生育量が不足しているほ場では、被害が大きくなるので、明渠の手直しなど、早急に改善する。

(2) 麦踏み

- ◆効果：霜柱による根の浮き上がり防止，風による土移動の軽減・防止，麦の耐寒性の強化，分げつの増加，徒長防止，など，多くの効果が期待できる。
- ・実施時期及び回数の目安は，離乳期（3～4 葉期）から茎立ち（主稈長 2cm，幼穂長 2mm 程度）までである。越冬後の実施回数は，1～2 回を目安とする。
- ・**本年は，積雪の影響が無いほ場では，鳥害が集中して食害の影響が大きいところも見られる。生育量が不足しているほ場では，麦踏み回数を少なくして，茎数の確保を優先する。**
- ・留意点：粘質土壌では，土壌湿度が高いと土がローラーに付着して逆効果になるので，土が乾燥しているときに実施する。



(3) 追肥

- ◆**越冬前の目標生育量(茎数 400～500 本/m²)が不足しているほ場では，株直し追肥を実施する。窒素成分量は，1～2kg/10a を目安とする。**
- ・幼穂形成期の追肥は有効茎歩合を向上させ，穂数を確保する。幼穂長が 2～3mm の時が目安で，この頃から茎立ちし，幼穂や節間の伸長が急激に進む。
- ・**幼穂形成期頃の窒素栄養状態の悪化は有効茎歩合の低下を招くが，窒素を過剰に施用すると節間伸長により倒伏を助長するので，適期・適量施用に務める。**
- ・追肥時期が遅れると，効果が十分に得られないので，幼穂長を確認し適期に実施する。

追肥の種類 (生育ステージ)			株直し追肥 (融雪後)	幼穂形成期 (幼穂長2～3mm)	減数分裂期 (幼穂長30mm)	穂 揃 期 (8～9割が出穂)
目 的			茎数の増加 葉色の回復	有効茎歩合増加 (穂数の確保)	一穂粒数の増加 登熟良化	小麦の子実タンパク質 含有率の向上
大 麦	時 期	シュンライ，ホワイトファイバー	2月	2月下旬～3月中旬	4月下旬	硬質麦防止のため 実施しない
		ミノリムギ		3月上旬～4月上旬	4月下旬～5月上旬	
	10a当たり 施用量		窒素成分1～2kg (硫安5～10kg)	窒素成分2～2.5kg (硫安10～12kg)	窒素成分2～2.5kg (硫安10～12kg)	
小 麦	時 期		2月	3月下旬～4月中旬	4月下旬～5月上旬	5月中旬
	10a当たり 施用量		窒素成分1～2kg (硫安5～10kg)	窒素成分2～2.5kg (硫安10～12kg)	窒素成分4～5kg (硫安20～25kg)	窒素成分2～2.5kg (硫安10～12kg) ※「夏黄金」は2倍

※「夏黄金」は 2 倍